



TITLE:

接触過敏性を有する海獺に観察された"lympholysis"について(
Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

松尾, 隆男

CITATION:

松尾, 隆男. 接触過敏性を有する海獺に観察された"lympholysis"について. 京都大学, 1967, 医学博士

ISSUE DATE:

1967-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212368>

RIGHT:

氏 名	松 尾 隆 男
	まつ お たか お
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 392 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	接 触 過 敏 性 を 有 す る 海 獺 に 観 察 さ れ た “ lympholysis ” について
論文調査委員	(主 査) 教 授 太 藤 重 夫 教 授 深 瀬 政 市 教 授 加 藤 篤 二

論 文 内 容 の 要 旨

著者は、湿疹性に感作された海獺の末梢血液中のリンパ球の in vitro における抗原に対する態度を観察する目的で研究中、その動物の末梢リンパ球の一部は、in vitro で自然に溶解し、その溶解は抗原を加えることにより、抑制されることを見いだした。この現象は未だ記載されていない。

すなわち

1) DNCB 感作海獺、あるいは p-NDMA 感作海獺の末梢血液中のリンパ球は、37°C, 19時間 incubate するとリンパ球溶解現象を示し、この現象は、それぞれの抗原を加えることにより特異的に阻止される。

2) リンパ球溶解現象には、補体の存在が不可欠である。

3) 感作海獺の血液中には、補体の存在のもとに、リンパ球溶解を起こさせる因子が存在する。これは 60°C, 3 分間の加熱により、また 5 日間の氷結により破壊されない。また、この因子は感作海獺のリンパ球にも存在し、これは容易に血液中、あるいは生食中に放出されるものである。

4) 血液中に存在する因子は euglobulin fraction 中に含まれている。

という結果を得た。すなわち、接触過敏性にみられる“lympholysis”は Favour の見いだした結核動物にみられる lympholysis と、因子が血清中に存在し補体の存在の必要な点で似ているが lysis の時間的経過、抗原の添加を要しないこと等で異っている。

接触過敏性は、一般に細胞により受身伝達され、血清によっては伝達されないとされている点から、本因子は直接過敏性に責任あるものではないと思われるが、生体内で湿疹反応が生ずる際、補助的な役割を果たしている可能性はある。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

著者は湿疹性に感作された海獺の末梢血液中のリンパ球の一部は in vitro に自然に溶解し、この溶解は

抗原を加えることにより抑制されることを見いだした。この現象は未だ記載されていない。本現象は下記のごとき性格を有している。

1) Dinitrochlorobenzene あるいは p-nitrosodimethylaniline 感作海狸の末梢リンパ球は 37°C に静置すると、その 40~50 %が19時間内に溶解する。この溶解は、それぞれの抗原を加えたときのみ特異的に阻止される。2) 本現象には補体の存在が不可欠である。3) 感作海狸の血漿中には本現象を惹起する因子が存在し、オイグロブリン分画中に含まれる。4) この因子は60°C、3分の加熱や5日間の氷結により破壊されない。5) この因子は、感作海狸のリンパ球にも存在し、容易に血漿中あるいは生食中に放出される。

本現象は結核における Favour の Lympholysis とは抗原の添加を要しないこと、時間的経過で異っている。

本現象が接触皮膚炎の惹起にどのような関連性を有するかについては今後の研究にまたなければならない。

本論文は学問的に有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。